

終末期医療を支援する臨床宗教師の育成事業

著者	前田 伸子, 佐藤 慶太
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	20
ページ	33-38
発行年	2015-03
URL	http://doi.org/10.24791/00000351



終末期医療を支援する臨床宗教師の育成事業

鶴見大学・鶴見大学短期大学部
先制医療研究センター

前田 伸子
佐藤 慶太

はじめに

鶴見大学・鶴見大学短期大学部では木村清孝学長（当時）のもと、平成21年から私たちの大学の母体である總持寺と大学との協同でビハラ活動を行うことを目標として、活動を開始した。「ビハラ」はもともとサンスクリット語で寺院あるいは安住・休養の場所を意味するが、近年、末期患者に対する仏教ホスピス活動を指すことが多くなつた。私たちは「ビハラ」を「生きることから死ぬことまで受け止め、寄り添う苦痛緩和と癒しの支援活動」と捉えている。まず、平成23年にグリーンケアを学ぶための研究会を設置し、研究会活動を開始し、平成24年度に上智大学グリーンケア研究所長（当時）の高木慶子先生と平成25年度に高野山大学の井上ウイマラ先生を講師にお招きし、一般公開の講演会を開催した。第1回目の高木慶子先生のご講演「悲しみの乗り越え方〜グリーンケアとは〜」で、心に受けた大きな傷を癒すのは「おおいなるもの」への信仰、委託、信頼であること、また、「グリーンフ・悲嘆」が精神や身体に及ぼす不具合に寄り添うことが「グリーンケア」であることを学ばせていただいた。また、第2回目の講演会（「悲しみを超える道」）で、井上ウイマラ先生は自分を大切にしていきて悲しむ道を見いだすことができた時、私たちが次の世代を育てる思いやりに身をつけることができ、この悲しみを思いやりにつなげることがあらゆる宗教の根源につながり、さらには私たちが持つ自然治癒力やレジリエンス（自発的な治癒力としての精神的回復）につなが

ることを分かりやすく説明してくださった。これら二つの講演会を経たのちに、平成25年に大学の附置研究所である先制医療研究センターが中心となり、公開シンポジウム「終末期における医療と宗教の協働化に向けて」を開催することができた。このシンポジウムが木村前学長の念願であった「大学とご本山とのビハークラ活動」を開始するための出発点となった記念すべきものであった。シンポジストとして、宗教学ご専門の教授、緩和医療の現場におられる臨床の教授、宗教者をお招きした。各シンポジストから、日本人の死生観、緩和医療における全人的な苦痛緩和、医療現場におけるグリーフケアの実際、さらには仏教における看取りの役割まで、まさに医療と宗教の接点を詳らかにする非常に有意義な講演を頂いたあと、総合討論ではフロアからの率直かつ活発な意見をいただき、実りあるものとなった。

一、終末期医療を支援する臨床宗教師等の育成事業

グリーフケア研究会での研鑽、先制医療研究センターによるシンポジウムを終えて、ようやく、ご本山と連携して、曹洞宗修行僧等を対象とした『終末期医療を支援する臨床宗教師等の育成事業』を開始することとなった。「臨床宗教師」という用語は英語の「チャプレンchaplain」の訳語として、仙台市を拠点とする「心の相談室」室長 故岡部健先生が考案した名称である（東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター、二〇一二、十二月十日）。東北大学実践宗教学寄附講座の定義によると臨床宗教師とは公共的施設で働く宗教者を指し、その役割は布教を目的とせず、宗教者らが宗教の違いを超えて、死期が迫った患者さんや遺族への心のケアを行うことである。東北大学では東北大地震後の平成24年に文学部に実践宗教学寄附講座を設置し、臨床宗教師養成事業を開始し、すでに全国の僧侶、神職、キリスト教徒、イスラム教徒など五十名以上が受講し、臨床宗教師としての活動を全国的に行っている。

二、 私たちが目指す臨床宗教師育成事業の概要

本研修事業は「臨床宗教師育成」を謳っているが、当面の目標として、ご本山で修行する修行僧に「ひと」を知り、その心に寄り添うための基礎的なコミュニケーション能力を演習・講義および講演で学んでいただくこととした。悲嘆者の心に寄り添うためには、その悲嘆の性質を理解するだけでなく、何よりも悲嘆者であるその「ひと」を知ることが不可欠であるからである。さらに、この研修で、傾聴に必要な基礎的知識および技能と態度を習得し、その後の臨床宗教師としての専門的な養成課程への進路に繋げていければと考えている。なお、本研修事業で実施する指導内容は、十年前から、鶴見大学歯学部部の学生を対象に実施してきた医療人間科学におけるコミュニケーション教育も実績を参考として、以下の二点に焦点を合わせて行うこととした。

1、自己の理解を深めること

「ひと」を知るにあたっては、何よりもまず「自己」を知ることが不可欠であるので、自分自身の経験、得意／不得意な行動、事物や人に対する肯定的／否定的視点と行動との関係などを振り返り、自己の課題を見出して、悲嘆者の心を受け止め、寄り添える傾聴者としての自己の理解を深める。

2、傾聴に求められる態度を身につけること

苦しい状況や悲しみのなかにおかれた人の想いを聴き、心に寄り添い、その方たちの世界に『共に在る』ことが傾聴である。その人の、恐怖、憤懣、幸福、条理や不条理、憂患、期待、要望などを理解し、感情の動きに配慮し、聴き取る耳を養い、その心に寄り添い、想い、感情、望むものが何であるかを話し手の言葉を通し、あるがままを理解する力を身につける。

三、臨床宗教師育成事業の成果

四月から始まった本研修事業は今までの八回目まで終了している。通常、コミュニケーション研修は毎週定期的に行われたり、ある一定の期間に集中的に行われることが多いが、本研修は修行僧を対象にしているため、彼らの修行の合間を縫って実施しているため、演習と演習の間が比較的長い。しかも、一回の演習時間が90分と短い、非常に変則的な形態を取っていて、スケジュールを作成した時から、演習の効果がないのではと心配していた。しかし、早朝から分刻みのさまざまな修行や作務が終えて、研修場所に集まってくる修行僧たちは疲れも見せずに毎回熱心に演習に取り組むだけでなく、演習終了時に提出する感想文から、彼らが毎回真剣に臨んでいる姿勢が伝わってくる。逆に研修を通じて、私たちが彼らから学ぶことが多い。

今後、この研修事業が私たちが最初に目標とした「ハーラ」に「生きることから死ぬことまで受け止め、寄り添う苦痛緩和と癒しの支援」活動の第一歩となることを信じて、努力を続けていきたい。

添付資料 1

- 平成26年度 先制医療研究センター「終末期医療を支援する臨床宗教師の育成事業」スケジュール
- 第1回 4月24日 オリエンテーション；今回の研修事業の目的と概要の説明
- 第2回 5月22日 コミュニケーションの基礎1a；『自己紹介』演習（演習時間は90分）

特別プログラム	6月14日	仏教文化研究所 先制医療研究センター (共催) 公開シンポジウム「心の安らぎを求めて～仏教者の社会参加～」
第3回	6月19日	コミュニケーションの基礎1b；『自己紹介』前回の演習の振り返りと講義
第4回	7月3日	コミュニケーションの基礎2a；『話すこと・聞くこと』
第5回	7月7日	コミュニケーションの基礎2b；『話すこと・聞くこと』前回の演習の振り返りと講義
第6回	9月4日	社会と繋がる仏教；講演1 谷山洋三先生(東北大学)
第7回	9月11日	コミュニケーションの基礎3a；『観察とフィードバック1』
第8回	10月2日	コミュニケーションの基礎3b；『観察とフィードバック1』 前回の演習の振り返りと講義
第9回	10月23日	社会と繋がる仏教；講演2 新川泰道老師(ビハラ秋田)
第10回	10月30日	コミュニケーションの基礎4a；『観察とフィードバック2』
第11回	11月6日	コミュニケーションの基礎4b； 『観察とフィードバック2』前回の演習の振り返りと講義
第12回	12月11日	社会と繋がる仏教；講演3 曹洞宗総合研究センター 平子泰弘老師
第13回	12月18日	研修を終えて；まとめ1
第14回	12月21日	研修を終えて；まとめ2
特別演習	12月21日、 1月29日、 2月12日	

添付資料2

平成26年度 先制医療研究センター「終末期医療を支援する臨床宗教師の育成事業」スタッフ
氏名：前田 伸子(1,2)、佐藤慶太(1,2)、佐藤洋子(3)、田中 倫(1)、小平裕恵(1)、
高屋継仁(4)、中村千賀子(1)
所属：(1) 鶴見大学、(2) 鶴見大学先制医療研究センター、(3) 宗教法人光明園、(4) 總持寺